大物主神について

肥後和男

三輪の大物主神については云ふべき事が少くない。先づ三輪といふ言葉の意味から考へて見よう。通説、この神の鎭り給ふ山の名は三諸山であり、三輪とは特にその神を指す言葉なりとする。この三輪てふ言葉の起源については古典に名高い故事を傳へて居る。誰でも知つてゐることではあるが、考への順序として一應これを顧なければならぬ。

一

古事記によれば所は河内國美努村と思はれる、こゝに陶津耳の女活玉依毘賣といふものあり、そこへ顏姿世に類ひなき神壯夫が夜半に來て相語らふこと幾許もあらぬに毘賣は身ごもつた。然し壯夫の素性が知れぬ。毘賣は父母の敎へに從ひ、赤土を床の邊に散らし卷子紡麻を針に貫き、この針を壯夫の衣の襴に刺して置いた。翌旦、見れば麻は戸の鉤穴より出でゝ、あとにはたゞ三勾遺れるに過ぎなかつた。その麻糸をしるべに辿りついたところは美和山だつたので、毎夜の神壯夫實はこの大神なることを知つた。これを美和の神とするは麻糸の三勾殘りしに因むといふのである。

新撰姓氏錄、大和國神別大神朝臣の條には云ふ。大國主命、三嶋溝杭耳の女玉櫛姫と婚し夜行き未明に歸る。姫、苧を績み衣に係けこれを求めしに、茅渟縣陶邑を經て大和國眞穗御諸山に至つた。還りて見れば苧の遺れるたゞ三蕊のみ。因て大三蕊と云ふと。

また土佐國風土記では大三輪の神、その婦倭迹々媛皇女に通ふこと毎夜にして曉に歸る。皇女これを奇とし針に綜麻をつけ襦を貫き置きたるに、明旦唯三輪のみ殘れるに因りそこを三輪村と名づくとする。

これらは共にその構造を同じくする神話にして、たゞ神と女と場所とに相違あるのみ、要するに所謂神婚神話にして、其の基礎には夫が妻の許に通ふ母系社會の慣習が存するとするは、學者の一般に認めんとするところである。たゞ通常の神婚神話と異る點は、特に糸が三勾殘りこれによつて神の名が發生せりとするところである。從つてこの項は神の名の由來を說明する爲に、後から神婚神話に挿入したものと認めねばならぬ。これについて從來の學者はいかなる解釋を下したか。

先づ本居宣長はこの傳說に大なる同情をもち、この說は「他より思へばいと物遠きが如くなれども此は其女の家より言初し名なるべし。然るはかの翌朝閉蘇に卷たる許多の麻の、わづかに唯三勾のみ遺れるを始めて見たる時の心を以て、三勾遺りし麻を認め行し處と云意にて美和とは云ひ初しなるべし」（古事記傳卷二十三）と述べて居るが彼の師、賀茂眞淵は早くこれに疑を抱き、この神が釀酒に深き關係ありて、三

輪の冠辭がウマザケ又はウマザケヲなる事に着眼し「供神の酒は齋瑳(イハヒベ)に釀て、その瑳ながら供る故に、みわ居みわを捧なといひて、其みわは釀瑳(カミワ)を略ていふなり」冠辭考二とした。この考へを更に發展せしめたのは鈴木重胤で、ミワは神酒の義なりと云ひ、更に釋して「美伎は美伎にて其の物を云ひ、美和は御瑳にて其器を云ふが、卽其の物名にも通はし云事なめり。水を美母比と云へる、母比は碗にて本器物の稱なるを御水(ミモヒ)、又主水(モヒトリ)など書に水名と爲るに等しかるべし」日本書記傳二十八と明快に論斷してゐる。

重胤のかく考へたのは、三勾云々の說は記の傳なれども、餘りに浮きたる事で信ぜられぬといふにあるのである。思ふに彼の考へでは神の名はその性質として普遍必然的でなければならぬ。換言すればその本質より來るべきものであるに拘らず、かの所傳は餘りに偶然的にして、神の本質とは何等の關係あることなく、從つて普遍化の要素を缺くとしたものであらう。この事は近世の實證的なる學問の精神より來る當然の態度である。その爲に彼は舒明紀が神酒を訓じてミワと云ひ、和名抄に日本紀私記云、神酒和語云美和とする等の諸例があり、且幾度か「オホモノヌシノ、カミシミキ」と歌はれて、酒の神たる風貌を著しく有するを見て、この說をなしたのである。これは一般的に見て極めて正當なる態度とすべく、爾來この考が廣く學者の贊するところとなつたのも、實にこの態度によつたのである然るに近時松岡靜雄氏は神酒を意味するミワは米醞の韓音ミオンより出でしものならんといひ、而もこれを神酒の義に用ふるは大體異例であり、三輪のミワは神樹(ミワ)にして、大物主の靈廟を意味するに外

ならずとした（日本古語大辭典）。この外管見の及ばざる卓説もあらうかと思ふが、今はこれらにとゞむることゝする。

以上諸説は各一應の理由を有し、傾聽に値するものであるが、なほ多少の疑義有るを免れないのである。第一眞淵のミワはカミワの略なりといふことは、既に麻持雅澄の反駁したるが如く、カミはカを以て語根とすべく、これを略することは困難であらう。（萬葉集古義一）次に重胤が神酒は本來ミキであるが、これをミワといふは、ミキの容器たる御瑟（ミワ）の語が、その内容物の名に移りしものであると考へたのも説としては甚だ巧妙であるが、根據不十分といはねばならぬ。なんとなれば古代に於て陶器をワと呼びたる例證は、不幸にして私の發見し得ざるところである。却つてミカ、ユカ、ヒラカ、サラケ、ナヘ、ツルヘ等が例示する如く、カ又はヘが陶製容器の名稱であり、全體としてはスエノウツハ、ハジノウツハ等とよばれたのであつた。またワが器物の惣名であつた、とする彼の説を支持する例があるか否かも疑問であり、器はウツハであつてウツワではない。とにかく彼が擧げた瑟をワと訓んだ例は見當らぬようである。加之、この神が本來酒を掌ることにその最高使命を有したとは考へられぬ。崇神紀にこの神の祟りによつて天下大に困憊し、この神を祭つて天下太平を得たとあるのは、必しも天下酒に醉ひて陶然たりし謂ではあるまい。元來それは副次的屬性であつたと見られる。それにしてもこの神が酒と深き關係を有し、ウマザケと冠辭せられるほどであつたことは事實であるが、重胤自身

も認むる如く、神酒は元來ミキであり、これをミワといふのは異稱である。この異稱が發生したのは言葉の構造より云へば、被冠辭を以て冠辭を訓んだのである。トブトリアスカてふ例に於て飛鳥と書きて、アスカと訓する如く、ウマザケ、ミワに於て酒に訓するにミワを以てしたのである。かくの如きことが可能であつたのは、冠辭と被冠辭の間に何等か相通ずるものがあつた爲ではあるが、それを理由として兩者が言葉として必ず同義であるとはいはれぬ。この場合では現實にミワの地で酒が作られたか、或は酒を作るものがこの神を祀つた、かしたのであらう。然し神酒が明かにミキである以上ミワの語義は寧ろ他に求められなければならぬ。所謂御瑟説が根據不十分とすれば、神榔説は如何といふに、その説はかゝる一般的名辭が、何故にこの神にのみ獨占さるゝに至りしかを、これだけでは説明してゐないのである。

二

こゝに際して再びかの三勾説が顧られなければならない。歴史的事實として見れば、眞に偶然的であるかの説話も、神話的事實としては却つて必然的であつたかも知れぬ。それは宣長の云つた樣にいかにも物遠い感じではあるが、この物遠さは實は我々が歴史的事實として、卽一回限りの當來事としてそれを考へることから來るのである。一度立場を換えて、神話としてこれを見れば、そこに何等かの必然的なものがあつた筈だとせざるを得ぬ。神話は單なる空想ではなく、生きた實在であり神話が

生きてゐた時代の人々にあつては、我々にとつていかに荒唐不稽と見えるものでも、一の疑ふべからざる眞實であつた。卽人々は各自の經驗に照してその神話的說明に滿足することが出來た理由があつた筈である。合理的必然的智識を求めるといふ人間の本質だけは、古今を通じて變らないと考へられるから、言葉通りに浮いた話、各自の經驗に何等の根據ももたない說が、そのまゝ社會に受け入れられ千年を隔てた我々に迄、傳へられ得るかどうか疑問である。この意味よりすれば三勾云々の說なども、確かにそれで不審のない時代があつたのである。我々が明かにしなければならないのは寧ろこの點であらう。

私はさきに三勾云々の項は、本來神婚神話に關係あるものでなく、たゞその神の名が三輪であつたことからこれを說明すべく、後から挿入されたものであることを推測した。しかもこの挿入が可能であつたのは、恐らく神自身が三勾の麻糸を以て、象徵されて居たので、針に麻糸をつけ男の素性を尋ねる話と結びついたのであらう。こゝから私の考へが始まる。卽この神は三勾の麻糸に象られて居たのだらう、といふのが根本の推測である。この象徵が意味する實在は蛇である。

大物主神が蛇體を示されたことは著しき事實である。崇神紀に云ふ。倭迹々百襲姬命が大物主神の妻となつた。然るに神は常に夜のみ來つて晝見えざるを憾み、これを神に語つたところ神の曰く「言理灼然、吾明旦入二汝櫛笥一而居、願無驚吾形一と、姬は密にこれを怪み翌朝櫛笥を見ると「遂有美麗小

蛇其長大如衣紐」あつた。姫は戒めを忘れ驚き叫んだので大神これを恥ぢ「忽化人形」し大虚を踐んで御諸山に登り、姫は戒めを破つた爲にその命を失つたと。こゝには三勾云々の話はないが、これを前述した古事記その他の記す三勾傳説に比するとき、この美麗小蛇長大如衣紐とある部分が、麻糸が三勾殘つたとする部分に恰當するものゝ如く思はれる。この兩者は恐らく關係があり、私の想像を以てすれば、三勾の麻糸を以てこの神を象徴する説明が、卽この神が長大衣紐の如き美麗小蛇の形を示したといふ話に在つたかと思ふ。この點が古典で明かでないのは古典の時代に於ては、既にこの神が「化人形」してしまつたからであらう。更にいふならばかゝる信仰がなほ民間に存したとしても、古典を作つた貴族社會の文化は既に動物神を否定するほどに進んでゐたから、この話が充分に理解されなかつた爲であるやも知れぬ。

こゝでも一つの推測が許されるならば、大物主神は三勾の麻糸を以て象どられ、これに仕へる巫女の箱の中に納められて居たのではあるまいか。これについて松本信廣氏が「古代日本人にとつて箱は神聖な性質をもつてをる。この中に神の御魂をおさめて持ち運ぶのである。この種の箱は女巫の生活に重要な役割を演じたものである。今もなほ死人の魂を呼び返す職務をつかさどる市にはその守り神のひそむ箱をたづさへてをる」（史潮一ノ一　笑ひの祭儀と神話）といはれたのは最も興味ある言葉である。かの九州の尾形氏が本來は緒形の意味と考へられ、それが三輪式傳説を傳へて居ることからも、これ亦この神の

形に關する異稱と推せられ、いづれにしてもヲを以て象徵されたと想像されるのである。

そうした事が有り得たらうとする傍證として、現今蛇を祭る民俗につき二三の例をあげて見よう。滋賀縣滋賀郡上坂本村は官幣大社日吉神社の鎭座する土地であるが、その末社に日吉御田神社があるこゝで毎年正月十五日を期して行はれる、御綱の神事は頗る盛大なものであり、其日氏子中より藁を集め、直徑六七寸長さ十二間の大蛇を作り、神殿の前にとぐろをまかせて積みあげ、三岐になつて居る頭部を屋上にのせ、恵方に向かしめる。これに對して神樂をあげた後、道路上に出して引きあふのである。同郡滋賀村大字滋賀里字見世では、正月七日山の神祭りにやはり藁の蛇を作り前記の如く捲きあげ、神主が祝詞をとなへる。この外同縣下では正月に山の神を祭り神木に藁の蛇をぐるぐゝ卷きつける例が甚だ多い。

かくの如き民俗は決して新しきものではなく極めて古き起源が考へられ、　それは大物主神を蛇體にあらはすことゝ、同一の原由をもつと思はれる。殊に日吉には天智天皇の頃、三輪の神を祭つて大比叡神としたと傳へられるが、それが單なる辭令的のものでなかつたとすれば、蛇神に伴ふ行事等も併せ移されたことを思ひ得るのであり、日吉御田神社の行事等はその名殘ではないか、とひそかに考へてゐる。この際蛇がオツナトよばれる—この名稱はかなり普遍的である—と同一の氣持で、ミワとする言葉が出來たのではなからうか。卷くといふことがこの動物の著しき特徵であり、それは輪として

形容せられ得べき形である。蛇祭りは集團的行事であり、巨大なる蛇を必要とするが、もし巫女などがこれを祀つてゐたとすれば麻糸などで事足りた筈である。然しいづれにしても蛇を象徴することは同一であり、而もその形に於ては共に卷けるそれであつたらう。日本靈異記の第三話に元興寺道場法師の傳を載せ、この法師は雷神の子であり非常な強力者であつたが、その生るゝや頭に「纏蛇二遍、首尾垂後」れて居たといひ、扶桑略記にはこの話を記し「靈蛇纏繞兒童凡三匝」と述べて居る。これも蛇が三つの輪として聯想さるべかりし一の例證である。尤もミは必しも三ではなく御であつた或は兩者を共に意味したとすることが出來よう。恐らく神話時代に於てこの三輪なる言葉は、人々をして直に彼の蛇を想ひ起さしめたのであらう。さうした普遍的經驗を神話は一箇の歴史として表現したのである。その事は蛇神の信仰の遍かりしことを豫想せしむるものであるが、蛇神は何故に遍き信仰の對象と成り得たか。

三

元來蛇に對する信仰は世界的なものといひ得るが、東洋に於ては主として水の神として信ぜられた。このことが我が國に於ても、その信仰を遍からしめたのである。なんとなれば、我が國民が農業生活殊に水田の耕作を試みるに至つた時、最も必要なものは水であつたからである。從つて我國に於て未だ農業が興らなかつた時代に、この信仰があつたか否かは問題である。よしあつたとしても盛なもの

ではなかつたらう。信州諏訪の神は元來鹿の形に考へられて居た。これは勿論狩獵社會の象徴であるが、而も中世に於てこの神は農業神たるべき蛇體を示すに至つたことは顯著なる事實である。かゝる推移が我が國の神々の形の發展過程に於て、稍廣き範圍に認めらるゝとすれば、大物主神なども最初から蛇の形をとつたか否かは疑問を容るゝ餘地がある。こゝに於て大物主神の原形を推して、三輪の祝が祝ふ杉といふ言葉の示す如く、彼の山を蔽ふ杉、もしくはその杉に蔽はれた山自體であつたとする考へが出てくる。鈴木重胤も「大三輪の舊號三諸山なりし事」を云つて居るが、金澤博士などが示唆されたように三諸は、山を意味する朝鮮の古語より解釋すべき言葉とすれば、元來山自體を祀りしものであり、蛇としての示現は第二次的な姿であつたかも知れぬ。また古事記に從へばこの神は丹塗矢となつて、三島湟咋の女に通つたとあるが、この矢を以て狩獵社會の象徴と見做すことも可能であらう。

これを蛇神の活動現象たる雷の象徴、或は愛の表示とする考へが成立すると共に、これを現實の矢としこれによつて鳥獸が狩られた社會生活が意味されて居たとすることも無稽な話ではあるまい。そこに大物主神の古き一つの姿がかすかに遺存してるとも見得るであらう。然しヤマトの文化は豐葦原の瑞穗國といふ言葉が示す如く、農業的なることをその著しき特徴とした。この事は大和民族に於ける農耕の起源が、極めて古きにありしことを想はしむるものであり、從つて大物主神が蛇體をとらねばならなかつた時代が、遙かに遠く始つて居たことを考へしむるのである。

そして前記の如く、この神が三島湟咋の女の許に通つたとする神話の如きも、この神を水神として蛇神として考へることによつてのみ理解されるであらう。湟咋の咋は大山咋神の咋に同じく神を意味する言葉であるとすれば、湟咋は要するに溝の神に外ならぬ。水田の耕作に於て溝の作用がいかに重要であるかは云ふを俟たぬ。記紀にも池溝を作る記事が幾箇所か見え、溝を埋めることは天ツ罪の一に數へられてゐる。溝は水田に於ける動脈であり、これなくしては水田はその生命を失ふであらう。こゝに溝の神の定立さるべき理由がある。而も溝がこの機能を果す爲には水がなければならず、こゝに大物主神が來り婚することを望まれるのである。

今、攝津國三島郡に溝咋村があり、溝咋神社が鎮座し、玉櫛姫が祀られてゐる。從つてこの話は多分この地方に發生したものであらう。この地方は現在の形貌より見るも、早く水田の開くるものあつて、池溝縱横に交る狀態を示したらうことが想察される。誠に溝の神を發生せしむべき好箇の舞臺であつた。特選神名牒によれば、溝咋村の東に三箇牧村があり、そこに三嶋鴨神社があつて、この神は昔、大物主神が溝檝姫に通ひし故事に倣ひ、毎年九月二十日、溝咋神社の南一町ばかりにある、御旅所に神輿の渡御あるを例としたとある。かゝる行事はその發現の年代を明かにしないから、或は後世に至つてこの神話に基き發生したものかも知れないが、この神話に恰當する何等かの儀禮が、古代に於て存せし事は疑ひ得ない。この神話が春夏の候雷鳴いかめしく水の溝に入つて來るといふ、一の自

然現象の說明であるよりは、寧ろさうした狀態の實現を强く希求する、農民の意志の表出であつた、と考へられるからである。そしてかゝる意志は、何等かの儀禮の形に於て、表示さるゝ事を常とするからである。古語拾遺に歲の神の祭として「以二牛宍一置二溝口一作二男莖形一加レ之」とあるのは、直接には溝に捧げられたことを意味するであらう。この男莖形は勿論豐饒の象徵であり、歲の神の生產力を示したものと思はれるが、これは明かに溝の神と歲の神との結婚の行事であつた。古語拾遺の著者が京都で生活した人であるのを見ると、かゝる行事も恐らく近畿に行はれたことであらう。溝咋村に於けるかの神話に伴つたと想像せられる行事が、果してこの種のものであつたか否かは、問題であるが、玉櫛姬又は玉依姬の名があることを見ると、それは今なほ近畿の諸社の祭に見られる、處女をして供物を神に捧げしむる類のものであつたかと考へられるが、この事は他日賀茂の神を論ずる際に詳說するつもりであり。三島鴨神社も併せてその時に讓るが、これは大物主神と同じ性質のものであることが推測される旨をこゝに記して置く。なほ溝檝姬、溝咋耳の女活玉依姬などとあるのは溝檝姬とあるのが早い形であり、後その父が考へられ溝咋の名がそれに移つたのであらう。

四

次にこの神の子とせらるゝ大田田根子について考へよう。崇神天皇の初年、疾疫流行し天下の民天亡するもの無數であつた。軈て神託によつて、これが大物主神の祟りと知れ、これを祭ることゝなつ

たが、同じき神の託宣によつて、その子大田田根子をして、これを祭らしめたるに、天下漸く平かになつたとある。書紀によると天下に布告して大田田根子を求め、漸くこれを茅淳縣陶邑に得たりといひ、古事記では河内美努村にこの者を發見したといつてゐる。その系統に關し紀、記並に舊事紀の傳ふるところ多少の相違がある。それを表示すれば次の通りである。

「書紀」

大物主神
═══
陶津耳―活玉依姫（或云奇日方天日方武茅淳祇之女）―大田田根子

「古事記」

大物主大神
═══
陶津耳命―活玉依毘賣―櫛御方命―飯肩巢見命―建甕槌命―意富多多泥古

「舊事紀」

事代主神
═══
三島溝杭―活玉依姫―天日方奇日方命―健飯勝命―健甕尻命―豐御氣主命―大御食主命―阿田賀田須命―
　　└大田田禰古命―大御氣持命―┬大鴨積命
　　　　　　　　　　　　　　　└┬大友主命
　　　　　　　　　　　　　　　　└田田彦命

書紀、古事記、舊事紀と次第に複雜になつて行つたのは、大體話の發展の順序を示すもので書紀の示すところが最古、形であらう。その大田田根子とは何であるか。

大田田根子はオホタ、タネコではなくオホ、タタ、ネコである。大は美稱、根子は天皇を稱して倭根子といふその根子に同じき尊稱であるから、問題はタタにあること明かである。そして書紀がこれを田田と記してゐるのを見ると、一應水田の意味に解釋して居たことが窺はれる。大物主神が一面に水の神であり從つて水田を支配するとすれば、その子に田の神があることは當然であるともいへよう太田祝など、同一視して居たことが考へられる。事實三島郡に太田神社あり、和泉に陶荒田神社があることを思べば、この解釋は一應の根據をもつものといへる。然し何故タタと重ねなければならぬかその點が問題である。日本紀竟宴和歌にも多々禰古乎云々とありタタが一の言葉であるとすれば、これを解釋する鍵は、大物主神に關してタタラといふ言葉があることにあらう。卽ち古事記ではこの神が三島湟咋の女勢夜陀多良比賣に通じて、比賣多多良伊須氣余理比賣を生んだと傳へ、神代紀にも大物主神の女に姫蹈鞴五十鈴姫命をあげて居る。大田田根子のタタは、このヒメタタラのタタに同じと見ることが出來よう。このタタラは、タタリ、タタルなどと同源であらう。その語義を詳にしないが、神が示現するとか作用するとかいふことを、內容とする言葉の如く思はれる。

かくの如き推測が可能であるならば、大田田根子は神の示現としてあらはれたものであり、ヒメタ

タラに對しヒコタタラであつたらう。言葉としてはタタラネコのラがネに吸收されてタタネコとなつたものと考へられる。この點が自ら賀茂の傳說との一致を導き出す如く思はれるが、そのことは他日に讓りたい。

大田田根子が大物主神の直接の子であるべかりしことは、以上の解釋によつて略明かであらう。從つて書紀の記すことが最古き形であると信ずるのである。古事記、舊事紀の所傳は、これに比すれば著しき發展を示して居り、大田田根子の原義は著しく不明瞭となつてゐる。それで我々はこの系圖がいかなる觀念によつて、構成されてゐるかを、先づ見なければならない。その觀念は思ふに三つの類をなすとせられよう。スヱとカタとミケとがこれである。陶津耳、建甕槌、健甕尻の三者は、共にスヱ系の觀念を示す。陶津耳は一派の學者が解釋する如く、その耳が陶(スヱ)の器(ウツワ)の把手の如き形をせる人を意味するのではなく、陶を掌る尊きものゝ義であり、建甕槌、健甕尻は共に甕を支配するものを意味し、陶の中の特殊なるものを意味する言葉である。かかるものが大物主について語らるゝ事は、云ふまでもなく、この神が酒を作ることに關聯するものであり、ミワスヱマツルといふ觀念に相應ずるものであつた。卽それは大物主が酒を作り、又はこれを貯へる器である。從つて陶津耳建甕槌などはさうした陶器の製作者を意味すると共に大物主自身の屬性の一を示したものに外ならぬ。といふのはスヱを掌るものとは、これを作るものと共に、これを支配するものを意味すると思ふのである。そしてこの話

が茅渟縣陶邑に結合したのは前者の意味からであり、事實そこで陶器が作られ、それが大物主の造酒の用に用ひられたからであらう。この土地は今の和泉國泉北郡東陶器村西陶器村の地方であると思はれる。そこは古代に於ける陶器の大生産地であつたことが、今にその遺跡から判斷せられる。そして建甕槌などが大神の子となつたのはこの神がさうした甕を知るものであつたからである。かくして陶津耳などがこの系圖の重要なる要素となり得たのは、この神が特に酒神たる風貌を備ふるに至りし以後であると見られるのである。

次はカタの觀念で櫛御方命、飯肩巢見命、天日方奇日方命、阿田賀田須命などがこれに屬するのである。カタの意味は種々に解せられ或は縣とすることも出來よう。然しこゝでは潟の意味に解することも可能であるかと思ふ。古代に於て今の大坂平野の一部が、潟の狀態を示せしことは、略想像し得るところであり、神武天皇東征して浪速の渡をすぎ、青雲の白肩津に泊したとする肩も、同じき意味であらう。これらの潟が、次第に乾拓されて、沃野となり、人間の住み得る土地の展け行きしことを神の力に歸しこれを讃歎した場合に、これらの觀念が發生したのではなからうか。かくして日方は干潟であり、御方は御潟であり、飯方は飯潟であつたらう。方とよばれる地名は日本に多數あり、それら凡てがかゝる解釋に恰當するものでないことは勿論であるがこの茅渟の地方に於ける解釋としてかゝる考へもなほ一說として提出され得るであらう。茅渟も或は茅沼であり、沼が半ば乾上つて茅など

の生えて居た景色かも知れない。最後に飯又は御氣の觀念卽食物を意味する名があるがこれは前述し來りしところより略察せらるゝ如く、この神が農業神たりしことより自然に發生せる人名であり、いづれも食物を保證するものであるが、或は潟が拓かれて田となり、そこから穀物のとれることが意味されてゐるのであらう。大田田根子が、特に田の字を以て記さるゝに至つた、と同一の心理がこゝに働いてゐるのである。かくしてこの系圖は大體大物主神の機能に基いて成立してゐるのであるが、これが特に河內和泉方面に於て語られてゐた話であるとしたら、陶が和泉で出來たといふ外に、三輪山の麓を流れる初瀨川の末が、大和川となつてこの平野に流れ出して居る、といふ地理的事情が何等かの關係をもつて居たと想像される。卽この川に於ける洪水渴水などの現象がいづれも神の意志に歸せられそのゝ爲にこの神を敬重しこれを祭つたことがあるのかも知れぬ。カタとの關係もそこから考へられると思ふ。

大田田根子が、神の示現としてあらはれる事から、かゝる系圖の成立する迄の過程には、種々の話の系統が混淆することがあつたようである。卽場所としては三島、茅渟、或は河內などがその要素となり、一方では陶とかカタとかミケとかが結合したのである。だからカタの子にミカがありミカの子にミケがあつたりするのであつた。その事はつまりこの神が至るところに示現し得るものであつたと、共に種々の屬性を有せしことにその原因があるのであるが、これを一貫した系圖に纏めようとし

た爲にこのような場所と觀念との混淆を見たと思はれる。そこでは大田田根子の原義は既に忘れられ只神の子孫として神を祭るものゝ如く考へらるゝに至つてゐるが、元來は所謂若宮の性質を有し、賀茂の別雷神などゝ同樣の位置にあつたものと考へられるが、遂に別雷神の如き權威をもち得なかつたのは、父神たる三諸山の神威があまりに大であつたからだと思はれる。

五

次に私は嘗て大物主と素盞嗚尊との關係を考へ、大物主神が蛇體として女の許に通つたとする說が素盞嗚尊が八岐大蛇を退治して奇稻田姫と婚した話と、同根であらうと推測したが、この機會に於てその事を一言しよう。蛇は元來神の姿であつたがその神の權威のあまりに强かつた事は人々をして自ら蛇を恐怖せしむる事が甚しかつたのである。この感情の昂進するところ、人は遂に蛇を以て人生を害するものゝ如く見るに至つた。而もその一面に神は既に顏姿世に比ひなき神壯夫と化して居たのであるがこれは自ら人生の兩面を示したものである。そして神代紀では事代主神が、八尋熊鰐となつて溝樴姫に通つたことになつて居り、他の場所では大物主神が美男の形で女の許に通つたことになる。それが倭迹々日百襲姫の場合ではこの兩面があらはれ、男の姿に於ける神の妻とはなつてもその神の眞の姿であり蛇を見た時には驚いて命を失はなければならなかつた。蛇の軈て退治さるべき運命は既にこゝに潛んでゐる。これを恐るべしとする心はこれを惡むべし斃すべしとの心に發展するのである

三輪傳說では神が神壯夫の形と蛇の形との兩面をもつことが、先づ明にされてゐるが、蛇の運命については充分に考へられて居ない。そこでは只糸をつけた針を衣の裳に刺して、男の素性を確かめるだけしかいはれてゐないが、この形が更に進めば、この針によつて蛇が殺されることになるのは、源平盛衰記に見えた緒方三郎の家の傳說によつて明かである。それは針をさゝれたことによつて、蛇が斃れるのであるが、この事が尾形家に勇士の生れる原因となるのである。卽蛇が死んでその强大なるマナが女の腹に宿つた子に移るのである。これは三輪傳說の發展した形であるか、それとも本來の三輪傳說にあつたものが古典の記事に落ちてゐるのか、分らないが、素盞嗚尊が八岐大蛇を退治して寶劍を得た話に相通ずるところがある。兩者の相違は女が針を刺したことによつて蛇が斃れるのと、ある男神がこれを殺したとする點である。この男神が卽素盞嗚尊であるがそれが決して外から來たものではなく、蛇の化したる神壯夫であつたことは、軈てそれが奇稻田媛と結婚することによつて證明せられる。要するにその原形は蛇神が女に通ふとすることに外ならぬ。而も大物主より素盞嗚尊に迄發展する爲には、地方的年代的の關係と共に出雲系文化の長き獨立が考へられるのである。

最後に酒と大物主神との關係を一瞥する。前述に從へばこの神は元來狩獵神たる痕跡を有するが、その最も著しき風貌は農業神であり、その時蛇神たる形態をとつたかと考へられこれに伴つて三輪の神てふ名稱を發生せしむると共に種々の神話を發展せしめた。大物主といふ名もこの頃發生したもの

と考へられる。この觀念は或は大國主と同一視されるが、觀念そのものについていへば、大物主と大國主とはかなり大きい差別がある。後者は著しく政治的な觀念であるに對し、前者は寧ろ經濟的なそれである。かの水神たる事も結局は人生に必要なる物を充足せしむるに至るべき階程であり、軈て大物主なる觀念に迄上昇すべきであつた。その大物主が各地に示現しそれ〴〵の玉依媛に憑るのはこれによつて物を豐富に致さしむる爲である。それは人々の最も望むところであるが、そのことを實現せしめ得るのは偉大なる物の主の力を假りなければならなかつたのである。

酒も一つの物であるから、この神の掌るべき範圍内にあつたことは疑ないが、それが最初から第一のものであつたのではなかつた。却つて穀物食物などを第一の掌るべきものとしたのであることは略明かである。それが恰も專ら酒を掌る神の如く見らるゝに至つたのは何故であらうか。元來酒は神の機能を遂行するのに欠くべからざるものであつた。卽神を祭ることが、社會現象の中最も重大であつたのである、といふのは社會結合が最高潮に達するのは祭であつたからである。これの實現の手段として主たるものは共同飲食であるがそれについては酒が最も效果的であることは明白である。山城國風土記に云ふ釀二八腹酒一而神集集而七日七夜樂遊といふのが、古代に於ける祭りであり、最近でも祭の時は氏子中が籠り堂に集つて、徹宵酒をのみ勝負事に耽つたりすることが行はれてゐた。そこに共同の感情と意志と、凡て社會結合の要素を爲すものは與へられたのである。酒はその中心的要具として

嘗てはあらゆる神がこれを作つたと思はれ、敢て大物主のみがこれを掌つたのではなかつた。然しこの神はその神威が盛であり、換言すればこれを奉ずる社會の廣く深かつたことは、酒を作ることを一層必要とさせたのであつたらう。やがてこの神が大和朝廷の大統一の中に入つて行つた時、この點が認められて酒の神となり了つたものと考へられる。その意味は嘗ては互に略同質であつた神々が統一された場合に殆ど必然的に見られる異質化の現象の結果であつたといふのである。卽嘗て全體の神であつたものが一層大なる世界に入つたときにその部分を掌るものとしてのこるのである。大物主神も本來の獨立の神としては、世の神であり、穀物の神であり、また酒の神でもあつたらう。然しそれが他の神々と共に統一された時、例べば世の神たる資格は天照大神に吸收され、五穀の神は豐宇氣神がこれを代表するといふ樣に次第にその屬性を失つて行き酒の神たる部分のみがこの神に殘されたと思ふのである。なほいふならば神々の統一と共にその分業が起る。その各が分擔すべき方面は、自ら神々の勢威によつて決せられる。堂々たる大物主神が纔かに酒の神たるに過ぎなくなつたのはこの神の勢威の衰への結果であつた。これは然し大和朝廷を申心とする貴族階級に對する場合であり、一般農民に對しては永くその神威を維持したかと考へられる。農民の生活を基礎としてこの神に關聯せる神話がいくつか發生したのはその一の證據である。（昭和六年六月七日）